

Title	太宰治『斜陽』研究史：一九八〇年代～
Author(s)	小澤, 純
Citation	太宰治スタディーズ. 2006, 1, p. 16-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97253
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

八〇年代、『斜陽』はかつての流行小説という位置から自立し現在論じる対象として読まれ、また改めて同時代の中での方位をはかる試みが多くなされた。その過渡期として、饗庭孝男『斜陽』太宰治』（『現代文学』80・12）は、太田静子の日記だけでなく山崎富栄との関係も創作過程に組み入れられることから、「回想を土台とした作品とは一線をひく独自の構造」を見、ローザ・ルクセンブルグへの言及に注目した。また大森郁之助『斜陽』結尾の混乱―直治の恋人の設定をめぐる―（『札幌大学女子短期大学部紀要』87・2）は、実生活から登場人物の設定に混乱が生じたという見解を控えめに「憶測」とし、あえて構成の破綻を指摘するに留める。

江種満子『斜陽』の女性―かず子を中心に―（『解釈と鑑賞』81・10）は、『斜陽』に遍在する「幸福」感に伴う「透明」さのイメージに切り込み、「透明な世界は必ずしも幸福ばかりを現わすわけではなく「死の世界を含」むことを分析した。それは「上原の妻の聖母子化」まで響くが、「おとき話」めいた操作にしか現れない「血の匂ひのする生」の幸福への希求を、江種は鮮やかに跡付けるのである。社本武『斜陽』と『斜陽日記』―私小説の変貌―（『信州白樺』82・10）は、「夕顔日誌」や「直治の遺書」の挿入によって、「彼女の理解の外にある直治の内面をえがくことができ、『斜陽』世界におけるへ生きていくもの」とへ死にゆくものとの対比を、より立体化し「たと論じる。千葉宣一『斜陽』試論―斜陽日記』の剽窃をめぐる問題」（『解釈と鑑賞』88・6）は『斜陽日記』のオリジナリティを検証し、K・マンズフィールド『文学する日記』との影響関係から太田静子の想像力を見出し、モデル問題に一石を投じた。

八〇年代には、多く執筆時代の証言や実証的研究が集まった。津島美知子『三月十日』（『回想の太宰治』83・6、講談社文庫）は、戦後津島家が没落する中『斜陽』が構想される空気を捉え、野原一夫「回想太宰治」（『新潮』80・3）は、太田静子の印象を中心に『斜陽』執筆時の太宰の周辺を詳しく伝えた。長篠康一郎『太宰治武蔵野心中』（82・2、広論社）は山崎富栄の側から迫る。井伏鱒二「下曾我のご隠居」（『新潮』83・6）は、太宰死後、太田との『斜陽日記』をめぐる取り決めの回想である。浅田高明『斜陽』を追って（『太宰治の「カルテ」』81・11、文理閣）・山本貴夫「太宰治・三鷹時代の足跡―戦後の仕事部屋―」（『解釈』85・2）は、それぞれ『斜陽』の前半部と後半部が執筆された現場を訪れ、写真や復元図で

その雰囲気伝える。相馬正一『評伝太宰治第三部』(85・7、筑摩書房)は、二度にわたる太田への取材に基づき、『斜陽日記』出版の経緯を示す。

時代といえ、松本健一『太宰治とその時代—含羞の人』(82・6、第三文明社)は直治を敗戦後に復員して来る「失われた世代」の代弁者として位置付け、奥野健男『歴史の斜面に立つ女たち』(85・3、毎日新聞社)も、かず子らを「戦後女性の原点」とし、「敗戦国の日本において、恋と革命」に生きるため、堂々未婚の母を、そして私生児の子供の存在を主張した。先駆性を評価する。そして時代と実証の狭間で問題を提起するのは、瀬戸内晴美・前田愛『斜陽』と太宰治』(月刊カドカワ)83・9)である。瀬戸内は連載第一回目を読んだとき「すごいショック」を受けたが、振り返って「何であんなに感心したんだろう」とか問い、前田も「あのころわれわれ読者が置かれていた状況をもう一編たぐり寄せ」る必要性を説く。瀬戸内は、『斜陽』の「現代的な意味」は「女の貞操関係」の激変を描いたことであり、『斜陽日記』と『斜陽』は全く違う作品としながら、実際に会った太田の肯定的な印象を小説の描写と切り結ぶ。前田は、「恋と革命」が太宰にとつては戦前から続く反復されたテーマであり、直治の復員という同時代的な問題も大岡昇平『武蔵野夫人』と較べれば設定倒れであるが、「虚しいあかるさ」という「戦争中の一つの動かしがたい気分」があることを評価した。

キリスト教からのアプローチとして、明司道雄『太宰治—その心の遍歴と聖書』(85・11、八木書店)は『聖書』からの引用を追い、日本語訳の曖昧さによる誤読を指摘しつつ、かず子にはその誤訳こそが必要であったことを論じる。郡仁次郎「太宰解釈上の二三のこと」(『文学と教育』89・12)にも太宰の『聖書』誤読の指摘がある。大越俊夫「この人を見よ—太宰治私論『斜陽』篇」(87・12、聖文社)は、太宰が自らをイエスに見立て描かれた小説として、『斜陽』を解説しようとする。

八〇年代に書かれた『斜陽』研究史には、荻久保泰幸(『別冊國文学 太宰治必携』80・9)、野坂幸弘(『国文学』87・1)によるものがある。総括するならば、小説そのものへの眼差しと実証の積み重ねが『斜陽』を生んだ時代への問いとして有機的な繋がりを持ち始めたのであり、この十年間は、来たる九〇年代の『斜陽』論隆盛を支える揺籃期だったといえよう。